

廣津和郎全集



広津和郎全集 第五卷

定価四二〇〇円

昭和四十九年九月一日印刷
昭和四十九年九月十日発行

著者 広津和郎

発行者 高梨茂

印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二―一
電話(五六―)五九二二

振替東京三四

広津和郎全集

第五卷

目次

女給

風雨強かるべし

あとがき

小說
五

女 給

女給小夜子

一

ええ、そうです。吉水さんにお会いしたのは、わたしが始めてカッフェエ・Tのお店に出たその晩でした。

その時がわたしが女給になった最初の時かって？

女 給
いえ、その前にもたった三日間、関口、それ、小石川の滝のあるあの関口御存じでしょう。あすこの小さな店にほんの三日程出たことがありますけれど、でも三日で止めてしまいました。それについてはとてもとても悲しい話があります

の。

あら、わたしが「悲しい話」と云ったらみんなで笑うのね。止して頂戴。こう見えたって、憚りながら最初からの銀座ガールじゃないんですからね。

でも、その話は後でしますわ。今するとこんがらかってしまいますから。

一日お目見得をして、二日目いよいよカッフェエ・Tの女給ということになりました。女給！ 何というイヤな言葉でしょう。一体何処の無神経な人間がこんな不愉快な響の言葉をこしらえたんでしょう。

女給！ 女給！ 女給！（彼女はきゅうという響にアクセントをつけて、鼻の頭に小皺を寄せて腹立たしそうに、そして又自分を小莫迦にしたようにこの言葉を繰返した）ほんとうにこの言葉を聞くだけでもつくづく厭になっちゃうわ。今日もお店に来る前に銀座通を好い気持でさっさと歩いて来る

と、すれちがった子供見たような中学生達が「ありやネコかい、トラかい」なんていうじゃありませんか。そう聞くと、折角の銀ブラ気分を一遍に頭からドヤされたような気がして、何処か穴でもあったら逃げ込みたいような気持になってしまいましたからね。

（作者註、——ネコはカッフェエ・黒猫、トラはカッフェエ・タイガの略。銀座ボーイの間には、ネコ、トラで通用す。）

ほんとうに失礼しちゃうわ。こんなに澄ましていてもやっぱり商売は商売に見えるのか知ら？……ねえ、何処かの若い奥さんに見えないこと？ これもみなこの錦紗の着物が悪いんですよ。錦紗なんて一体何でしょう？ こんなペラペラ光った派手なものなんか堅気になったら要りやしないじゃありませんか。

で、兎に角二日目いよいよお店に出て、隅の方の腰掛にしょんぼり腰かけていたんですよ。そうしたら栄さんが手招きしてわたしを呼びますの。

「此処にいらっしゃい、小夜子さん、一寸、一寸」

わたしがその側に近づく、と、栄さんはボックスの中に腰かけている肥ったお客にわたしを紹介して、

「小夜子さん、この方が吉水先生、吉水薫先生！」

わたし一遍に頭が逆上して眼の前がくらくらして来ました。「まあ」と思わず呟かずにいられませんでした。

カッフェエ・Tには随分いろいろ有名な方が来られるということは前から聞いていましたけれど、いきなり出たその日に吉水薫先生にお会い出来るなんて夢にも思いませんでした。何しろ吉水薫先生、詩人の吉水先生の名を知らないものは日本中の何処にもいやしいんですもの。

わたしやっぱり東京だと思いましたわ。田舎にいたら到底お会いすることなんか出来ないのに、東京の、そしてこんな場所だと、こんなに容易くお会いも出来ればお話も出来るんですから。

「此処にかけ給え」

身体に似合わない細い声を出して吉水さんはテーブルの向いの腰掛を指さしました。わたしそこに腰を下ろしながら、「よろしく」と小声でいうと、

「うむ。君は何というの？」

「小夜子と申します」

「国は何処？」

「北海道ですの」

「北海道の何処？」

「札幌でございます」

「ああ、札幌か。僕も札幌には行ったことがある。あすこは人情が醇朴でなかなか好いところだね。僕は講演に行ったんだが、町を俥に乗って行くと、向うから来かった小学校の

生徒達が僕の名を呼んで、僕の俤を指さすじゃないか。僕は妙にうれしかったよ。大人達にそんな事をされても何とも思わないが、子供なんですね。妙に純真なものに打たれる気がしてその土地そのものが愉快になったよ。そうか、君は札幌か。それは好いところだね」

「はあ」

わたしはやっと受け答えるだけで胸がわくわくしていました。えらい人にも似合わず何という単純さ、何という飾りけのなさでしょう。そういう調子で田舎にいた時分からあこがれの的だった吉水先生に親しく話しかけられたんですから、二十の小娘がぼうっと上氣してしまったのも無理はないでしょう。

わたしは上氣しながら恐る恐る吉水さんの顔を見ました。そうしたらまあ、何と肥っていらっしやるのでしょうか。吉水薫さんというとても優しい背のすらりとした、如何にも詩人詩人した方のように思われるでしょう。ところが御本人に会って見ると肥ってがっしりして、詩人という感じではなく実業家と云った恰好なんですもの。

わたし吃驚してしまいました。まあ、この方があんなに細かに女の氣持が歌えるのだらうかと。……でもその後いろいろな詩人や文士に会いましたけれど、そういう人達は大概想像していたとは違って優男よりは肥った頑丈な人が多いよう

です。殊に優しい心持の書ける人ほど肥っていますの。普通の世の中の人でも、女に熱情などを持つのはどっちかというと肥った人に多く、瘦せてすらりとした人なんていうものは却って冷静で皮肉なようですわ。

吉水さんは帰り際に、

「さあ、君握手しよう」

わたし何気なく手を出すと、吉水さんの指の短い丸っこい手がわたしの手をぎゅっと握りしめました。そして握った拍子に紙の丸めたようなものが無造作にわたしの掌の中に押し込まれました。あっと思ってたし無意識に軽く頭を下げましたわ。

だってそれが十円札を小さく丸めたものだったんですもの。十円札！ わたしどんなに嬉しかったでしょう。何しろ始めての日でしょう、「まあ、こんなに沢山に頂いて！」と思うと何だか胸がいっぱいになってしまいました。こうしてカフェ・Tに出るまでにはそれはいろいろ苦労をして困りに困り抜いた揚句だったんですもの。十円のお金を手に入れるのはどれだけ働かなければならなかったか、それと思うと、こうして無造作に容易くこんな大金を頂いたという事が夢のように思われてなりませんでした。今では十円位呉れる人があつたって別に驚きやしませんけれど。……

この不景氣に十円なんていうチップを呉れる人がそうざら

にあるかつて？

ええ、さらにはありませんけれど、世の中には物好きな人があつてちょいちょいそんな人がありますわ。目的があるんじゃないか？ そうね、ある場合もあるしない場合もありますね。でも何でもなく呉れる人も確にありますよ。どういう気で呉れるんだか知らないけれども、そんなお客さんは多分何かで儲かつて嬉しくって堪らないので、その嬉しさの分けまえをわたし達にも分けて呉れるんだらうと思うから黙つて貰つて置きますわ。——もっとも、近頃緊縮風が吹き出してからは少し減りましたけれど。

その翌日、又吉水さんが見えになりました。そしてやっぱりわたしの番じゃなかったのにわたしを呼んで、そうして帰る時「握手しよう」と云つて紙の丸めたのを掌の中に押込めて下さいました。その日は五円札でした。でも、それから毎日々々お見えになつて毎日々々わたしに五円ずつ呉れるんですもの。そう云つちゃ何だけれど、ついあの方の見えるのをこつちでも予算に入れて待つているような工合になつて来ますわ。

兎に角わたしに取つては大事な大事なお客さまでした。

前のように固い調子で「札幌はいいところだ」などと云わなくなり「小夜子、小夜子」と呼びつけて親しい調子で可愛がつて下さいました。

やがて来る時にはわたしに電話をかけてわたしの番をたすねて下さるようになります。

「小夜子、君がいらないと行つてもつまらないからいるかいな
いか電話をかけて見たんだ」

「是非いらつしやい。お待ち申しております」なんて、はしやいだ声で電話口で平気で云えるようになった時分には、ウエトレスももう一人前ですの。

「君の番はまだかい？」

「ええ、今廻つたところですけれどね。何とか都合して、先生を待つようにさせて貰いますわ」

何しろ吉水薫先生と云えば、T・カップエ中でも人気のあるお客様だったでしょう。それが小夜子、小夜子、とわたしをばかり大事にして呉れるようになったんですから、ヤキモチ焼く人も随分出て来ました。けれどもこういう社会では毎日々々人気争いでもしているのが楽しみなんですからね。赤組に來ているあのお客さんを、こちらの紫組に取つちまいましょうよ、なんていう事になると、組と組とが争う場合なんかもあるんですよ。

「Nさん、少し紫組の方へもお出かけなさつて」

こんな事を云つて眼の縁でにと笑つて見せたりして、それからそのお客様がこつちの組に來るようになってしまった時の愉快さというものはありませんわ。組と組とが争い、又一

人一人が争い、それは暗黙の間の生存競争なんでもの。

スターという自信のあるものだったらみんな心の中でそんな争いをしているんですよ。つまり「人気」のスポーツなんですからね。中には又自信のない人がいるでしょう。そんな人で利口なのは人気のあるスターと仲よくしますの。そうすればそのスターをひいきにしているお客様が又そのスターと仲の好い他の女をもひいきにして呉れる、という寸法になるわけですからね。

そこで大切なお客様の吉水薫さんがわたしをばかりひいきにして下さるという事がはつきりして、新米のわたしが一躍みんなの注目の的となると、敵も出来る代り、又わたしと仲よくしようという味方も出来て来ます。

一ヶ月位でわたしもどうやらT・カフエエの人気者の一人になってしまいました。

或日、吉水さんがわたしにこう云いました。

「明日横浜のオデオン座に行かないか？」

「ええ、先生がつれて行って下さるなら、わたし喜んで行きますわ」

「それじゃね、明日新橋のプラットフォームで待っていないか。午後一時に」

「ええ、待ってますわ」

わたし北海道から出て来て東京は充分知りましたけれども、

まだ横浜はよく知らないのです、吉水さんに横浜につれて行って貰うと思うと嬉しくなっていました。

そこで翌日午後一時頃、二等の切符を買って、新橋のプラットフォームで待っていました。

十分位待ったでしょうか。見ると吉水さんがせかせかした様子でプラットフォームに上る階段を上って来る姿が見えました。背が低くて横肥りに肥っていて、小股にちょこちょこ歩いて、歩きたんびに身体を左右にひょいひょい揺る形——まあ、余り好い恰好ではありませんが、でも世の中で働ける人が持っているあの精力的な強さと云ったものは、その恰好によく現れていました。茶の中折を面深く被り、その下からくしゃくしゃと目鼻立のはっきりしない顔の道具立を見せてせかせかわたしの側に寄って来て、

「大分待ったかい？」

「いえ、そんなでもありません」

「実はね、今日は一寸忙がしい事が出来て横浜まで行かなくなりましたんだよ。仕方がないから自動車で何処か郊外でもドライブして帰って来ることにしよう。自動車は停車場の外に待たせてあるんだ」そう云ったかと思うと、どんどんプラットフォームから降りて行ってしまいました。わたしは返事もしない中に。

わたし切符が惜しいと思ったけれど、仕方がなしに吉水さ

んの後について改札口を出て停車場の入口に行くと、ほんとうに一台の自動車がそこに待っていました。しかもそれがバックカードの新型ですの。わたし吃驚して眼を瞠っていると、「さあお乗り」

吉水さんはそう云って悠々と先に乗って、毛皮の敷いたクッションの上に埋まるように腰を下ろしました。わたしも続いて乗って腰を下ろすと、何だか身体がふうわりとして好い氣持ったらありませんの。何と云ってもその辺にぶらぶらしているタクシーなんかとは違いますからね。——素晴しいものね。文士でそんな高級な自動車に乗れるんですから。

その時分は道がまだ今ほど好くはありませんでしたが、それでもシューッと滑るように走って行って、少しも動揺というものが感じられません。

烏森から御成門を通り、芝公園を抜けて、それから慶応義塾の少し先を右に曲ったあたりまでは、わたしにも解りましたが、それから先はよく道が解りません。吉水さんに訊くと高輪だと教えてくれました。そこから暫くすると品川の停車場前に出て、それから京浜道路を速力を早めて氣持の好いドライブ。他の自動車が一所懸命走っているのを苦もなく抜いて行ってしまうでしょう。わたしこんな自動車を乗廻している吉水さんの生活なんてどんなに幸福なんだろうと思いました。そして自分も何だか急にブルジョアにでもなったような

氣がして愉快でなりませんでした。

大森の海岸まで行くと、

「何処かで飯でも食わない」吉水さんはそう云って運転手に車を停めさせました。

「それよりその辺を少し散歩しましょうよ。わたしお腹は空いていませんから」

車を下りると、わたしは歩き出しました。

「散歩したって仕方がないじゃないか。僕はまだ飯前なんだ。腹が空いてるんだからつきあって呉れないか」

「ええ、でも少し歩きましょうよ」と云ってわたしが歩いて行くと、吉水さんは息を切らしながらついて来ます。十月のぼかぼかした日ですのに、見ると可哀そうに吉水さんの額には汗が出ているではありませんか。

「歩くと言ふ奴は僕には苦手なんだ。第一大森の海岸なんか歩いたって面白くないじゃないか」

肥っているので股擦れでもするのでしょうか、とても歩きにくそうにしています。——ほんとうに大森の海岸なんて歩くところは何もありませんのね。海と云ったってあの通り眺めはなし、海岸というよりは河縁という感じなんですもの。わたしだってあんな処をいつまでも歩いているのは面白くも何ともありませんでした。

でも男の人に我儘を云って見て、イヤイヤながらもその

男の人が此方の機嫌を取るように云いなりになって呉れるのはとても面白いんです。殊に吉水薫先生なんてついこの頃までは側にも寄りつけないようなえらい人に思われていた人が、わたしの云う通りに「僕は歩くのが苦手だ」なんて不平云いながらも一緒に歩いて呉れるんですから、わたし自分の価値が一遍に上ったような気がして愉快でなりませんでした。併しさんさんそうして歩きまわった末に、吉水さんの云う通りとうとう一軒の料理屋に這入る事を承知してしまいました。吉水さんはお酒を飲まないの、サイダーか何かで直ぐ御飯になりましたが、別段あの辺の料理なんておいしくも何ともありませんでした。

御飯を食べてしまうと、

「君、一寸隣の部屋に行こうよ」と吉水さんが云いました。隣の部屋がどうなっているかわたしにはちゃんと解っていました。もう少し前女中が「お支度が……」というような事を云って、手をついて、お時儀をして引っ込んで行った時から、わたしにはそれが解っていました。それだから身体にスキのないように身構えていたんです。

「君、一寸隣の部屋に行こうよ」

吉水さんはわたしが無言でいるので二度云いましたが、わたし何だか可笑しくて堪りませんでした。だってその云い方が余り不器用なんですもの。

「厭です」と云うと、

「そんな事云わないで、一寸でいいから行こうよ」

「昼間っから、そんな事って……おかしいわ」

「いいじゃないか、一寸行こうよ」

「厭です」

随分長い間そんな問答を繰返していました。でも、わたしが身体に隙のないように身構えているものですから、言葉以上に腕ずくでなんというような乱暴な態度は流石に執りませんでした。

「どうしても厭？」

「もっとよく考えて見ますわ。兎に角今日は先生とただ散歩に來ただけなんですもの。わたしそんな事思ひも寄らなかつたんですもの」

恥を掻かせるのも厭だし、それに何と云っても好いお客さんなのでこれきり怒らせてしまうのは悪いという気がしたので、そんな風に当らず障らずに答えていると、とうとう終に我を折って吉水さんはこう云いましたつけ。

「君はなかなか貞操堅固な人だね」

わたしふきだしそりになるのをやっとなぐりました。「君はなかなか貞操堅固な人だね」なんて、まあてれ隠しにしたって余りまずい云い方じゃありませんか。——そうよ。わたし吉水さんをほんとうに可愛らしい人だと思いました。

「じゃ、帰ろう」

「ええ」

立上り際に吉水さんはいきなり唇を持って来ました。「あッ」と思う間にわたしの首はすっかり吉水さんの両手で抱えられてしまいました。そうして何だかとても男っ臭い息で口をふさがれましたの。息も出来ない位。

「放して頂戴、先生、苦しいわ」

「併し僕は君を好きなんだよ」

例の細い可愛らしい声でそんな風に一所懸命弁解しますの。そしてわたしの首を放して、無造作にトンビを引っかけましたが、見るとボタンを一孔間違えて掛けているではありませんか。そしてそのまま平気な顔をして部屋を出て行こうとするものですから、

「あら、先生、ボタンが……」

わたしは追っかけて行つてそのボタンを掛け直して上げました。わたしその無造作な子供のようならしのなさが益々可愛くなりました。無論人間としてですよ、へんな意味ではありませんよ。

帰りに例のバックカードで有楽町まで送って呉れて、わたしが車を下りようすると、

「小遣におし」そう云つてわたしの手に紙幣を捻込んでくれました。後で見たらまあ十円札が四枚ありました。

二

丁度その時分、吉水さんの外にもう一人わたしを可愛がつて呉れる客が出来ました。この人も毎日来ては、わたしの番であつてもなくつてもわたしに沢山のチップを呉れますの。これは吉水さんと違つてもつと若い人——三十一二の人で、或会社に出っていました。

そうですね、なかなか顔立の好い、好男子でした。おとなしい人で、冗談口一つ利かないで、帰る時恥しそうにそつとわたしにお金を握らせましたの。

何処か真剣なところがその様子に見えていました。別段何処かへ遊びに行こうなんて云い出すような事もなく、唯恥しそうに伏目になりながらも始終わたしを眼で追っています。

——あんまり真剣だと何となく恐くなりましてね、側に寄ると息のつまるような気がして煙たたくて仕方がありませんの。

併しわたしに深切にしてくれるお客さんですから、その人が来るとわたしは側に行つてやつぱりチャホヤしないわけに行きませんでした。それに何と云つてもチップを沢山呉れるお客さんですからね。正直な話。——ねえ、チップ、チップというとなんやうですけれど、でもチップを沢山貰いたい